

水トラストニュース

2010.6 No.23



もくじ

報告: 第3回木曽川流域圏シンポジウム	1
春を食べよう2010	5
3ヘクタール終わって、新しい6ヘクタールへ	7
2010年度定期総会案内	9

報告：第3回木曽川流域圏シンポジウム 「御嵩町・産廃処分場問題は終わっていない」

シンポの当日、朝起きるとあたりは雪景色。名古屋で今冬初めての雪が降ったのである。これでは来たい人でも来れなくなる…心配しながら会場の名古屋工業大学へ向かって自転車をこいだ。

市村さんの労作になる大看板を正門前に設置。140人収容の大講義室には2枚のスクリーン。2枚目は、登壇者の紹介や木曽川の風景などを映すつもりある。準備に追われているところへ御嵩から来た人たちが到着。御嵩出発の時はまだ吹雪模様だったという。

第1部を始めるころにはなんとか50名ほどが集まってほっとしながらスタート。まずは司会から木曽川に面した急斜面での巨大産廃処分場計画が明らかになって以来、柳川町長襲撃事件が起きたこと、産廃問題に関する全国初の住民投票が行われて計画が止まったこと、今年になって御嵩町産業廃棄物処分場計画地利用指針検討委員会が設置され、恣意的な委員選考や住民投票の結論を揺るがしかねない議論経過があったことなど、14年間の流れを大急ぎで紹介した。次いで、御嵩町住民投票直接請求代表者であり、条例の条文などを書かれた田中保さんから住民投票が行われた経緯について報告していただいた。約90%の投票率で80%が産廃処分場拒否の投票をした、すなわち全有権者の70%が産廃拒否の意思表示をしたことになる。署名運動の当初から1万人の拒否投票を目指していて、そのとおりの結果を得ることが出来たと話された。続いて、前御嵩町長・柳川喜郎さんが立ち、東京都は明治時代に奥多摩などに26000haの水源林を購入したこと、横浜市は大正時代に山梨県道志村に2800haの水源林を購入し、戦後になって道志村にゴルフ場立地問題が起きた時に水源基金を設置して道志村の応援をしたこと、甲府市も富士川上流に水源林を持っていること、一方名古屋市は大正3年に木曽川の水利権をタダで手に入れたのに水源林を持っていないし、木曽川上流に対してほとんど何もやってこなかったことを指摘された。また、木曽川の水を一滴も飲んでいなくて高価な飛騨川の水を引いている御嵩町民が、安い木曽川の水をジャブジャブ使っている名古屋など下流域住民の飲み水の安全に配慮した投票を行ったことが改めて確認された。(なお、出版されたばかりの柳川さんの著書「襲われて - 産廃の闇・自治の光」(岩波書店)が受付に並べられたが完売した。)

みだけ産廃を考える会で処分場反対運動をしてこられた岡本隆子さん(現御嵩町議)からは、御嵩町産業廃棄物処分場計画地利用指針検討委員会設置の経緯や、そこで行われた議論、「利用指針のための基本的考え方(案)」とそれに対する「御嵩産廃を考える会から提出した意見書」、「利用指針(案)」(シンポ資料として配布された)などについて説明があった。「利用指針(案)」に対しては18通の意見書が寄せられ、そのうち14通が「小和沢に産廃関連施設を造らないことを明記すること」を求めていること、それを受けて利用指針原案の結語で「住民投票の結果を尊重して利用計画を策定」とされていたのが「産廃処理施設を設置しない」と明確な表現に改められたことなどが報告された。



さらに岡本さんは壇上から「この会場に御嵩町役場の職員と可児署の公安担当刑事がいる」ことを明らかにし、会場に緊張が走った。「やっぱり御嵩産廃問題はまだまだ終わっていない」ことが参加者一同に実感として感じられた瞬間であった。そもそもどうして公安の刑事が市民団体主催のシンポジウムの監視をしに来るのだろうか。もしかしたら誰かに買収されているのかも…？（ちなみに、彼らは第1部終了時点で姿を消した）



小和沢の生物調査を13年間余り、合計159回にわたって続けてきたスズサイコの会・梅北征子さんの報告は圧巻だった。サシバ、オオタカ、ノスリ、ハチクマ、クマタカなどの猛禽類、キクイタダキ、ウソ、ミゾゴイ、コノハズクなど…次々と登場する鳥たち、小和沢は実に豊かな鳥たちの棲みかとなっているのだった。植物に関するデータも鳥に負けない豊かさを示し、絶滅が危惧される植物が多数確認されていることが明らかになっているが、盗掘を恐れて写真が映されなかったのが残念だった。「スズサイコの会」と御嵩町民中心の「オオタカと美しい自然を守る会」が続けてきた膨大な調査記録は、「小和沢利用計画指針のための基本的考え方(案)」に対する意見書でも大きな役割を果たした。検討委員会はこの貴重なデータについて議論しなかったし、御嵩町役場も評価しようとしていないのは残念なことである。専門家の調査ではないというのが彼らの言い分のようなが、分類学や生態学の分野では在野の研究者、卓越したアマチュア研究者が果たしてきた役割は大きい。レッドリストなどの基礎データでもそれらは大きな貢献をしているし、万博開催をめぐって揺れた海上の森の環境アセスメントでは専門家の調査結果の誤りがお母さんグループの調査で次々と明らかにされたことは記憶に新しい。そもそも、牧野富太郎やファーブルだって在野の研究者だったのである。

第1部は名古屋市の水源地に関する提案を総合討論への宿題としていったん締めくくり、休憩をはさんで第2部のみんな演奏に入った。間伐材で制作された創作楽器「みんな」を、創作者である川合ケンさん自身が演奏してくれるという貴重な時間である。華奢に見えるが意外に堂々とした音である。イマジンなど数曲が演奏され、最後は「ふるさと」を参加者も一緒に合唱して終わった。

第3部は、「生物多様性と木曽川流域圏」と題して流域各地で活動するグループや個人からの報告である。2010年10月に名古屋市で開催される生物多様性条約締約国会議COP10では、木曽川上流域の生態系サービスであるおいしくて安全な水や、農林産物を享受する下流域都市圏の責任として、上流域支援の義務が議論されるべきであるという文脈で設定されたテーマである。

トップバッターは徳山ダム反対運動を中心的に闘ってこられた近藤ゆり子さん。つい最近出版された「徳山ダム導水路はいらない」(風媒社)の著者でもある。生物多様性に関連して、利用のメドが立たない徳山ダムの水を890億円もの追い銭をして木曽川まで運び、湯水時に木曽川中流域のヤマトシジミを塩害から守るという怪しげなこじつけ(環境維持用水というらしい)をひねり出した国土交通官僚どもの浅知恵(悪知恵)の紹介をされた。そもそも長良川河口堰建設によって長良川のヤマトシジミは壊滅状態になっているわけで、その下手人どもが木曽川のヤマトシジミを守るというのだから笑止千万である。

その長良川河口堰のまずい水を飲まされている知多半島・東浦町で木曾川水源への復帰を訴えている神谷さん(東浦町議)は、工業用水に回されている木曾川の水を都市用水(飲み水)の管路に流し、長良川の水を工業用水に回すというスワッピング案を図入りで紹介した。すでに管路は全てつながっていて、単にバルブを切り替えれば良いだけの話なのである。現実には長良川上流で化学薬品が流入した時は緊急時対応ということで知多半島の都市用水が木曾川水源に切り替えられたことがあったそうである(2000年の出来事)。水問題はハードでなくソフトだけで解決できることが多いという指摘はとても重要である。水利権をふりかざして水の調整と融通をしようとする国土交通省や愛知県企業庁は、実に莫大なムダと不条理を生産し続けている。神谷さんの報告でもう一つ素晴らしい指摘があった。「洪水と旱魃は防げない」である。すでに国土交通省は100年に一度来るような洪水は防げないことを認めるようになったが、100年に1度の旱魃については今だにダム建設の言い訳に使って、調整と融通を認めようとしていない。もうダムの時代ではないのである。造りすぎたダムの補修だけでも莫大なお金とエネルギーが必要なものであって、これ以上のダムを造るべきではないのである。これほど説得力のある神谷さんの意見書案が、東浦町議会で自民党と公明党の反対にあって6:13で否決されたそうである。

日進市、豊明市、三好町などをつくる中部水道企業団が2001年から1トン1円の水道水源保全基金積み立てを開始し、毎年3000万円のお金を王滝村などの木曾郡木曾広域連合に送っている。東郷町議の山口洋子さんは、第2回木曾川流域圏シンポジウムで聞いた水源基金について東郷町議会で提案したそうである。この提案を聞いていた別の議員が中部水道企業団の議会で提案して水源基金実現の運びになったのである。さらに東郷町では、名古屋市・御岳市民休暇村に宿泊する町民に1泊2000円の補助金を出したり、王滝村に間伐枝打ちボランティアを送ったりしている。この市民休暇村は名古屋市の行政評価でCランクとされ、廃止すべき施設リストに載せられてしまっている。しかし、人口が1000人を切り、公債比率が夕張市を超えて日本一となって苦しむ王滝村にあって、市民休暇村が約100人を雇用しているという状況を考えれば、名古屋市の都合だけで簡単に廃止を決められるべきではない。名古屋市による水源林としての買取、あるいは、名古屋市との飛び地合併なども視野に入れた王滝村支援策が考えられるべきだろうという話も出た。(このあたりで川合ケンさんは、来年夏あたりに休暇村を舞台にしたコンサートを企画してはどうだろうかというアイデアがひらめいたそうである…懇親会でうかがった話)

「流域自給をつくる大豆畑トラスト」の歴史も10年を超えた。全国にいくつかある大豆畑トラストが遺伝子組み換え作物を食べたくない、輸入や栽培をやめさせるための運動であるが、ここ木曾川流域のトラストはまず「流域自給をつくる」ことを最初に掲げている。この運動を

提案し、流域を回って生産者を探し回った故由利厚子さんの呼びかけ文が紹介された。きっかけは御嵩町に計画された巨大産廃処分場問題だったのである。この問題が起きたことによって、流域全体とりわけ下流域から上流域を見るまなざしに覚醒させられたと由利さんは書いている。

最後は主催団体である木曾川水トラストの木亦さんから、御嵩町での森林ボランティア活動の報告であった。住民投票の後、下流域で集まった寄付金600余万



円を御嵩町に役場に持参したところ、当時の柳川町長から御嵩町内に森を買うことをすすめられたことに端を発して、トラストの森「水源の森・みたけ」が誕生し、隣接する民有林で間伐や枝打ちの練習が始まったこと、間伐材で総ヒノキの小屋が建ったこと、3年前からは御嵩町有林 3ha の整備を引き受けて、毎月2日間ずつの御嵩通いが続いていること、間伐材の木材市場への出荷実験やパルプ材としての出荷なども行っていること、御嵩町のイベント「環境フェア」や「みたけの森祭り」などにも出展して町民との交流を図っていることなどが紹介された。

シンポジウム開始以来4時間近くが経過し、参加者に疲れが見えてきた頃ようやく最終の第4部突入。司会がこれまで出た話の簡単なまとめをした後、フロアに発言を求めた。まず、藤前干潟を守る会代表の辻淳夫さんが立って、貧酸素水塊が発生する伊勢湾三河湾の惨状を修復するためには藤前干潟を守るだけではだめで、集水域とりわけ上流域へのまなざしと行動が必要であることに気がついたこと、そのことを契機として伊勢三河湾流域ネットワークが結成されたことなどを話された。本日の資料として配布されたものの中に、このネットワークから出された流域宣言があり、そこでは流域をバイオリージョン(生命圏)としてとらえ、下流から上流を支援する仕組みづくりを求めていることが紹介された。

続いて名古屋水道労組の渡辺泰委員長から興味深い以下の発言があった。実はすでに名古屋水道労組から名古屋市当局に対して水源林保全の提案がなされている。1914年(大正3年)に始まった名古屋市の水道事業が、2014年で100周年をむかえるので、その記念事業として水源林保全を、格好のテーマとしてほしいと願っている。ただし、木曽川沿線400kmのうちどこに水源林を求めるべきかとなると簡単には決められないだろう。これまで名古屋市が上流自治体として交流事業などを行ってきたのは名古屋市が事業に参加しているダムのある自治体(味噌川ダムのある木祖村や岩屋ダムのある下呂市など)を中心に取り組んでいる。木祖村においては水道局職員の研修が行われ、水道労組も間伐や枝打ちの活動を行っている…さらに続けて、柳川さんが紹介された水源林を持つ自治体、東京都や横浜市は独自のダムも保有している。名古屋市も戦時中に藪原ダム建設計画を立てたが、その後沙汰やみとなった。

渡辺さんの話はなおも続いた。名古屋市水道の年間収入は498億円(上水分のみ、そのうち給水収益は459億円)、河村市長は5億円規模の水道料金値下げを提案しているが、その分を水道職員の人件費ほか行財政改革によってカバーしようとしているのだそうである。木曽川が町内を流れているにもかかわらず木曽川の取水権がない御嵩町では、名古屋市民の2倍以上の高額の水道料金を払わされている。安全でおいしい木曽川の水をジャブジャブに使っている名古屋市民の水道料金を下げるのではなく、苦しむ上流域を支援するために値上げする、あるいは水源基金として余分に徴収して上流域に送る、あるいは水源林を購入する方向に進むべき時なのである。このことを市民の側から提案し、実現に向かって積極的に進んでいくべき時なのである。このシンポジウムの終わりにこうした貴重な情報を提供していただき、木曽川トラストの目指すべき今後の方向性が明確に提示されたように感じられた。その方向性のもとに、御嵩町の皆さんとの連携を一層強め、同時に木曽川上流域全体とのつながりも求めていく必要がある。

学内の別の教室を利用して開かれた懇親会にも多くの方に参加していただいた。準備不足にもかかわらず、盛りだくさんで消化しきれないくらいの課題と報告者を詰め込んで開催したシンポジウムであったが、結果的には充実したものとなった。報告者の皆さん、参加された皆さん、スタッフで頑張っていたいただいた方々など全ての皆さんに感謝したい。それらの皆さんとともに、今後は一層、流域の協働と、上下流間に存在する不公平、不条理の解決を目指して進んでいきたい。(大沼淳一記)

春を食べよう2010 二部構成

4月の第2土曜は、恒例の「春を食べよう」です。中公民館に集まった半分位が、新しい参加者、はじめて、です。最近森林ボランティアや材木に直しかにふれたいという人が多く嬉しいですね。知らないグループに一人で(それも遠方から)参加して下さる気持ちに敬意!!です。又ボラみみの力は絶大です。ボラみみに感謝!!ここで平手さん率いる食事用意組と、山作業及び森林体験組に、午前中は分れ出発です。ところでこの日は、一度私達の山へ来たい、山仕事をする若い人達の話を知りたいとおっしゃっていた松山さんという、山仕事の大先輩も初めて御一緒にしまして、チェーンソーを研ぐ技と、伐る技を拝見(個人的に)したのですが、テープを巻いている木を伐るのが一般の常識らしく、一ヵ月後、テープが巻いてあるから伐る木だろうといきなり大木を3本も伐って悪かったねえ、としきりにあやまられてしまい、「まっ、いいじゃないですか」と笑っても、しばらく恐縮されてしまいました。当然のことですが、テープを巻いた木ばかりなので、これを伐ったらこの山は丸ぼうずだと思われたようで、一ヵ月後誤解がやっと解けたのでした。思い込みというのは、会話を難しくするなと感じたことでした。

2時間余の山仕事を後に、小木曾さんの家に全員集合、すでに平手さん達が野草の天プラと豆腐の田楽の準備を整えて待っていてくれました。庭から一段低くなった所から広がる田んぼの中で、田植準備をする小木曾家の人々を眺めながらの宴会です。

炭火で焼いた豆腐の田楽は、タレのこげ目とお豆腐のフワフワが絶品、桃色の花びらが美しい桜ご飯、早川さんと宮澤さんの卵、定番の野草の天プラの数々、手前ミソですが、中華風おこわ、宮澤さんちのモチ米に黒川、西尾さんの干シイタケを使いました、如何でしたでしょうか。山の精気を吸い、美味しい食べ物を前に皆、いい顔でしたね。

檜三郎からさくら小枝ちゃんへ

今年の食事準備組の様子はどうでした? ビール飲めました?



「春を食べる会」を私は「春食べ」と呼んで、毎年楽しみにしている。なんたって春だし、緑が芽吹いて、明るくきれいだし、生きる力があちこちに見られる。その景色のなかで昼ごはんを食べれるなんて、「本当においしかった」という記憶のもとに楽しみにしているわけだ。

ここ2年くらい私は調理班に入っていて山の仕事はしていない。調理班の仕事はすきだ。調理と言ってもたいした仕事はしていない。犬山のおばさんたちの用意がしっかりしてるからだ。いろいろすごい量の

準備してくる。春を食べるためのてんぷら用野草:よもぎ、ゆきのした、コンフリー、ねぎぼうず等たぶん8種類以上…がそろえて袋に用意されてる。和え物用の野草7種もゆでて、あえる直前までできて、直径30cmくらいのボールにいっぱいになっている。あえる「ゆず味噌」も手作りで準備されている。田楽豆腐は朝早くに買いに行っている。付ける味噌は中津川からの胡桃がたくさん入ったおいしいもの、それも用意されている。焼くための道具、なべ、布きんまで準備万端だ。昨夜は何時まで準備してくれたのかな…と思う。でもいつもなにもいわずに笑顔でいてくれる。



その中で私のすることは、料理をのせる皿の用意、田楽に串を通すこと、天ぷらのために粉をつけて、ころもをつけて揚げること。いつも春の空気を吸って、おしゃべりを楽しみながらする準備は楽しかった。いつも作ってからみんなが来るまでが待ちどうしかった。みんなも山で体力仕事してくるから、おなかすいてるだろう、早く来ないかな…と思って待つのだ。

でも今回は参加者が30人近いと聞いて、天ぷらを揚げ続けていた。やってきたみんなの顔がいきいきしている。知らない顔も多かった。若い人が増えた。まだまだ自然の中が好きなのが多くいるんだなあ、ちょっと不思議な感じがした。

私は作った天ぷらを3つの大皿に分けて持っていく。できた田楽を最後山椒ものせて持っていく。5分ぐらいで皿が空になっていた。作る、なくなる、もって行く。そのたび、並んだ和え物や、誰かの差し入れのおこわや、おにぎりなどがどんどん減っていくのが見える。みんな楽しそうに話して食べてる。

私は…作るだけ、運ぶだけの役目。天ぷら3つぐらいつまみ食いをしたけど…今までそんなことなかった…今回は新メンバーも多く、自己紹介が始まった。それも途切れながら聞いていた。

私も食べに来て、多くの人と話すことを楽しみにしていた。だから「春食べ」なんだ。でも今回雰囲気も話題もわからず、人とも話せず終わった。後片付けの時間が来て、洗い場を往復しても、食べてる席は変わらない。そして帰る時間となり、名古屋に着くととても寂しい気分だった。なんだかこの一年も山に行きたくなくなりそうな予感がした。

初めての参加者もこんな気持ちになる人がいるかもしれない。おしゃべりの好きな人は一方的に話しただけ話して満足し、でも初めての人はしゃべる機会もなくその雰囲気になじみずに参加した意味がわからなくなる。こんなことのないように、次回は“小枝”が参加して、いろいろな人と話すチャンスをつくらなくては。

さくら小枝から檜三郎兄さんへ

檜兄さんからのメール受けて、思ったこと書きました。ビール？ 最近の宴会はアルコールにきびしくなって、それに飲む人は一人でいっぱい飲んじゃうし、私は飲めませんでした。とっても残念。

3 ヘクターが終わって、新しい6 ヘクターへ

第 期御嵩町町有林整備事業が終わり、第 2 期事業が始まりました

2007 年 1 月に御嵩町との間で締結した「御嵩町町有林を対象とした市民ボランティアによる水源林整備活動」事業第 期分 (3ha) が完了しました。予備的な試伐を開始したのが 2006 年 10 月で、作業終了が 2009 年 12 月でしたから丸 3 年間かかったこととなります。役場の原簿に記載されていた隣接する私有林との境界が間違っていたトラブルで半年間の中断がありました。8 月はお休みの月だったので、正確には 30 カ月 (正味は 30 日) でやりとげました。全くの素人木こりから始まって、ちりも積もれば山となる、結果を見ればなかなか大したもの。チェーンソーの目立ての技術も上がってきました。極上の鯉節のような切り子が出るようになった「達人」もいます。

間伐したヒノキとスギは約 3000 本、枝打ちが約 300 本です。作業参加者は延べにして 1040 名でした。愛知県から 720 名、岐阜県から 280 名、それ以外に東京都、長野県、宮崎県から参加者がいました。

無事故でやりとおすことが出来たのが最も良かったことだと思います。間伐の手が入らずに密生してモヤシ状になっていた人工林ですから、伐倒しても懸り木になってしまうことが多く、それを外すのに大汗をかきます。危険も増します。時にはひやりとしたこともありましたが、なんとか無事に切り抜けてきました。道路沿いは電線が走っているために、特に気を使いました。木の重心は道路側に倒れたがっているのです。それを何とか山側に倒すには工夫が要ります。道路に沿った木にわざと懸り木にしておいて、懸ってから山側に引くという裏技も使いました。

間伐が終わって、暗かった森は一気に明るくなりました。暗い森に群生していたショウジョウ

バカマが少なくなるかもしれません。尾根に近い部分はヒノキの植栽密度が低くて、針広葉樹混交林になっていましたが、ほとんど大部分はヒノキ主体の人工林でした。これが狙い通りに混交林になってくれるかどうかは、10 年間ほど様子を見たいところです。

残念だったのは、間伐材の出荷が出来ずに切捨て間伐になってしまったことです。わずかに、町営のマレットゴルフ場のコース整備に数 10 本の丸太が利用されただけにとどまりました。水源の森の方では、大王製紙へのパルプ材としての出荷が始まっていますが、町有林では町役場の動きがにぶくて実現していません。50 年生の立派なヒノキがそのまま森の中で朽ちるのはもったいない限りです。

ボランティア参加者の数と平均年齢がこのところ変わってきました。「ボラみみ」などのインターネットサイトを見て、若者がやってくるようになったのです。就



御嵩町有林第 2 期の森

職難の都会を脱出して木こりを目指す1ターン組が増える時代が近づいているのかもしれませんが、初めての人が多いほど間伐の仕事ははかどりませんが、我々は能率を上げる必要はないので、安全第一、楽しみ第二で慎重に作業を進めています。土曜日に水源の森で作業した後、綱木公民館で宿泊するのですが、囲炉裏を囲んでの食事と語らいが夜中まで続きます。イノシシ肉やアユの差し入れがあって大いに盛り上がる時もありました。

間伐・枝打ちの作業以外にもいくつかの活動をしてきました。「御嵩の森祭り」や「御嵩町環境フェア」への出展をしてきました。なごや環境デーにも出店して名古屋市民に木こりボランティアの勧誘をしました。2008年3月には、日本水環境学会水環境文化賞を受賞しました。2009年4月から2010年2月にかけて、なごや環境大学講座「水はどこからくるの?」(全8回)を行いました。御嵩町の水土里隊、炭焼き研究会、僊歴会、オオタカを守る会、希少野生生物保護監視委員、ふるさとを愛するスズサイコの会などのみなさんに講師になっていただいて、下流域市民に御嵩町に通っていただきました。

さて、第2期事業が始まりました。1ha区と5ha区の2か所です(地図参照)。大きい方は、小和沢を通して丸山ダムに下る県道が見晴らしの良い崖の上を通る時に右手に広がる森です(写真参照)。産廃処分場計画が持ち上がって以来何度も眺めた風景の一部です。やはり50年生の人工林で、沢筋はスギ、それ以外ではヒノキが主体です。途中で間伐が行われた形跡のある部分ではかなり立派な材になっている木も沢山あります。今度こそ、切捨てでなく有効利用する方策を考えたいと思っています。県道に接した森なので、出材にも有利な条件があります。とりあえずは小さな方の森の間伐を進めながら、大きな方の森の出材方法を探っていきたいと思っています。水源の森の方では、懸案だった炭焼きやテーブルやイスなどの木工品加工をやってみたいものです。御嵩町内の民有林家との交流も進めたいものです。

第1期の経験からすると、第2期は5~6年がかりになるでしょう。筆者は現在65歳です。ということは、今度の森の間伐が終了する頃には70歳になっていることになります。その頃には、石油の高騰が定常化し、木材輸出国が丸太輸出を制限するなどのことが重なって、輸入木材の単価が上昇しているかもしれません。いよいよ国産材の出番がくるということです。そうなれば、チップ材をエネルギー源とした暖房やボイラーの普及が本格化するでしょう。その頃には、ボランティアでやってくる若者たちの一部が定着し、中には木こりになりたいという人も出てくるかもしれません。その頃が筆者の引退時期でしょう。木こりを引退して、山登り三昧のステージが始まるでしょう……

(大沼淳一記)



県道の崖部分から見た大きな方の森

2010 年度定期総会のご案内

時：6月20日（日）14：00～17：00

場所：名古屋働く人の家（地下鉄・伝馬町下車、徒歩6～7分）

議題：2009年度事業報告および決算報告

2010年度事業計画および予算報告

その他の報告



気軽に、楽しく山仕事に参加しませんか

とき：毎月第2土曜日およびそれに続く日曜日

集合場所：御嵩町・中公民館（名鉄広見線・御嵩口下車、すぐ）

集合時間：午前10時（日曜日に日帰りの方も同じ時間に中公民館にお越し下さい）

参加の方法：電話、ファックス、電子メールなどで申し込んで下さい。

申し込み・お問い合わせ先：TEL 052-735-5453 (市村) FAX 052-779-4291 (大沼)

Email : mitake500npo@yahoo.co.jp

参加者の服装・持ち物：長袖、長ズボン、作業の出来る履き物、弁当、水筒

（宿泊出来る方は：寝袋、洗面セット、食器、ハシ）

宿泊先：ふれあいセンター（御嵩町上之郷字綱木）、日帰り参加も歓迎です

表紙の絵は早川さん作、文中のイラストは岩間さん作

発行

特定非営利活動法人 みたけ・500万人の木曾川水トラスト

〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬2-28-14 名古屋働く人の家気付

TEL & FAX 052-682-4737

郵便振替00800-9-64810

URL <http://homepage3.nifty.com/mitake/>

e-mail mitake500npo@yahoo.co.jp